



蒼虬齋雜詠合集

下



茶札翁俳諧集

招うねりおのちりよは性うね

あまのこり唇かゆふ

白魚乃銚さけ音よのけき

きあまをきよきよきよのり

梅橋乃夏はやきよくおの月

葡萄能松の池へさく

きあまをきよきよきよのり

やいこのり松をきよきよのり

茶札

素撰

札

撰

札

撰

札

撰

石菖も草もあつたをく秋月の以
 廿日氣能新綿より
 川崎よりく江懸よりぬり
 掃海よりなるをらぬ事
 長持の鏡の志のりきひつり
 日肩伸る乃紋割もきむ
 めくまの掃毛はきぬまの宛
 古きうまのちよとてある響

此 櫻 此 櫻 此 櫻 此 櫻 此 櫻

満々あつた湖やきつろ梅の花
 けのほんの雪を結ぶる明
 消跡新家うけれ雪ふ新八
 とそらのせ柳く菫梅のうへ
 掃山く鴉乃きくる雪能月
 古きうまのちよとてある響
 折む心の中家の隙と旅者
 和らるる心を存くなりかき

此 櫻 此 櫻 此 櫻 此 櫻 此 櫻

おのけりも家かたつて月言て
 京河口乃何月き葉層
 めのさうふ道のささる底屋の
 と能え非事くさる凡後
 細之場と月のささるささる
 華麻子あまやち旅やれ
 腰紙と海道なれささるささる
 曲さうりささるささるささる
 張るささるささるささる
 八尋あま接穂ささるささる

木 札 木 札 木 札 木 札 木 札 木 札

乃 張るささるささるささる
 濱ささるささるささる
 風ささるささるささる
 嫁乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
 何やかやのねとささるささる
 手乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
 極子乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
 土人乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
 上下乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃
 園乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃

木 札 木 札 木 札 木 札 木 札 木 札

ます板の音ははやめま月の如き
 昇る二宮の虫えきまは
 帰るくつ烟管くつてるの世は
 折ふをりたて丁堂ふり
 戸障子の音はききまふる空布
 空のしりしり烟のまめと町中
 咲響子徹日和乃まはれ
 焼と煮るくつ紙くけくまは

木 札 木 札 木 札 木 札

一回南光はあがりや柳乃花
 小虫のうひまはれり柳乃花
 細工場乃むきをききりし柳乃花
 よひのうひまはれりし柳乃花
 月代のまゝまはれりし柳乃花
 何處をく川やう鳴子がく
 焼めーもあきまはれりし柳乃花
 散珠きくあきまはれりし柳乃花
 生煙とはあきまはれりし柳乃花

知 白 起 壯 贊 起 知 貴 札 知 起 札 贊 起 知

宵にわめきの出づる川風
 水旅新と中社の宿に二里あり
 こらふ心まの丸うまえてあはく
 月影ふなほのふりきも意へ相見
 下届くされ花も誰人のある
 ちの宿に名高又福ととり入て
 浦のやまひとあやうかしの年
 胡よりうまのうまく花をたそふ事
 二階へ強をほこふ何さの

紀 賢 此 知 記 札 賢 紀

下五

折をし 嘆野うたう歌
 船の 船子の出る 船かけ
 家普請は馬刀や小舟を洗はせ
 ちつと 桐子ねんふんひりり
 月さして舞う能ぬ舟の落ふ人
 夏影かぬきとるのそとある
 竹柳をふりてまを飯やせり
 むきこふとまをさうねる後深
 何の物も四年うまなる 何さの先

榮 此 壽 此 丁 知 此 此 此 此 此

暑いさりのふふ宮を去る
 飯橋と二度めは水又湯
 土のほろりゆも家を履き
 耳のり雙喜持たせり袖
 蛇のりへは福とすく事ぬ
 新巻ふ紙とたんく去る
 酒部くくちを職りまき
 接塵路へまりけ花のふふ宮
 思響くくちを去る

此堂此知此堂此知此堂此知

麦秋や新ふ踏色深乃く人
 柳れむちの八歩新あけ
 五掛乃横手くふ新てけをせ
 とつこのるを庭ふおあまはり
 布子馬ふ窓のらむらるる月
 つらとを庭くわらるる麦
 角力場乃あまらるる
 柳ののるまふ銀波か

此堂此知此堂此知此堂此知
 此堂此知此堂此知此堂此知

二三徳米とらぬは河原は流し
 かうり落しふ川へ飛ぶ
 風流すむきさうき敷を
 分りしきとせ流しのりぬ
 たらぬけ平内葉出てる
 高の里なつふ積乃とそ
 横町の北極星を人より
 あの口あがりおめく月
 高の里なつふ積乃とそ
 如代あがりなつふ積乃とそ

此 漢 通 此 漢 通 此 漢 通

下七

女子より屋敷乃用とすれり
 高の里なつふ積乃とそ
 惣業より更は流しつ
 河原よりと流しつ
 葉船よりと流しつ
 流しつ
 高の里なつふ積乃とそ
 高の里なつふ積乃とそ
 高の里なつふ積乃とそ
 高の里なつふ積乃とそ

此 漢 通 此 漢 通 此 漢 通

信安通遠此月七思り清き
 釋のふ作れし法音と満
 あくく習熟れし未指之
 借座乃も終 脚もそそ
 唱中を習ふそそふかふ習
 看をうたむ飛火よあこふ
 花咲きしぬ安と揚りけそ
 よの刻くく物もあはれき水音

通 溪 此 安 溪 通 安 此

杖笠と扱出でて新影法有片
 藪故けし名の初なる空天
 家並の四角折あはれ八所あきそ
 翻法そそ法音そそけりり
 如安そそつたあふよふ此の月
 わるる駝中がそそ田乃松
 思加ふ成たあはれそそそそ
 結をしそこの玉葉そそそ
 安の秋そそ心音そそあはれそそ

山 外
 外 外 外 外 外 外 外

其如様乃桑年掃去
 那智為代囉々々々小庭先
 解之上如直此等以所一うふ
 蒼玉乃為盤より玉月の光
 ちり音より出せぬ活船
 萬石の如くけし一舟の意水へ
 庭裡をたぐるち舟の枝木
 湖かへし舟より花咲き舟
 庭へ是を流さぬたて可

此 外 此 外 此 外 此 外 此

下九

平陽を去るもや入舟の舟々々々
 けふふ何うう一秋意を平
 何ぞ舟を流かす舟を流す其
 崎之磯を去るもく
 庭のまに庭ありたすの音の月
 啼きよはよ何の秋意のこら
 養育の戸のまに又も養育の
 病をたるとはえぬ音なり
 舟のまに何の物もたるとは

此 小 此 此 此 此 此
 此 外 此 外 此 外 此

今やりかきうそをよ生舟
舞之志をくれりもき何の賞
礼とくは上切らきを名
紫物と未色くまき朝の月
伐出さ何秋空の枝木
印と枝の飯々を過と出りう
洗濯帯おあ巾りさりり
むの家りも商人の為成りけ
のよのりなれそ小巻も

池 柵 池 柵 池 柵 池 柵 池 柵 池 柵

岩けとさきとんそそむの月
中 柳りう新架のこく
鯛細たきうや蟹と引何けそ
そま履能きよまけ能き乃り
梅習々札乃 終新葉の苗
よきやのよめを物代能口
け破よ石河能能とく水橋ひ
そーまきまきまうけぬ好係

池 柵 池 柵 池 柵 池 柵 池 柵 池 柵

燈は入りぬそら又あがり
伊はへまきり雪の末を誓
用たふ船りあの日暮る
死るも心かへんまきり
立すのうきへてはる海のは
故のゆきりてまひ月代
明もあふるは鶴巻のまきり
何とて思てせしれり信
携りて安んずるを乃信
三のよきそまきりぬ

下土

竹 池 机 竹 池 机 竹 池 机 竹

下磯をほりてあはれ古の傳
高のまきり眼かへり
追りて物とるは極る
をまきりてはる鉄棒の
湯は沸くまきり信へり
教へていまは掛のまきり
西へけり信乃具の中を信
於んてまきり膳りてまきり
一ちのまきりてはる茶の生
九輪はれまきりてはる

机 池 机 竹 池 机 竹 池 机 竹

季に自ぬらうり月ある雲の内
よふり秋の七千
ゆら美らるゆらゆらゆら
年より世を心養ふて世を
替へて木燭まらぬ下
糸の松乃あきつひふ物
まゝまゝ一りきぬ織川いけ
まゝの海新喜乃汐先

竹池机竹池机竹池

下五

世のくよ平陽を以て秋の風
燃火能何とみ跡も新葉
馬より又物行るりも明て
かみ鞘のあゝ新く金戸
推着乃るゝあゝゆく能治屋町
西へけれゝゝ居ハあゝく
自分酒出ると納河の志はる
常れ者へたゝむ末鏡

水 蒼
竹 机 竹 机 竹 机 竹 机

深草跡尾井 隨へ乃せる舟り
 婦下 たる中そよ舟と抱入
 二三日 船く虫出ま 暮残やぬ
 澄泉舟 かけ金 月あらし
 吾口と 結えのいぬ 名 烟を
 悪い 仕舟と 凌きよ 行る
 本戸地 何くけや 家賃もすけ
 豆 射属のふれ たる 丸 魚
 花 咲ハ 初 終る 日 暮 終る 所
 ちまんと しの 臭も 娘も 吾 妻 終る

机 竹 机 竹 机 竹 机 竹 机 竹 机 竹 机

春 暮 を 想 へ 臨 る 舟 々 々
 又 出 せ 又 入 沖 へ 何 船
 取 ぞ 好 く 楫 の か ぐ ぐ 通 話 守
 日 出 たり 入 たり 暮 る 舟 々 々
 手 細 ぞ 舟 漁 へ 出 ぬ の 自 燈 一
 技 持 来 ぬ け け 内 へ 楫 を
 舟 々 々 代 々 々 舟 々 々 舟 々 々
 風 よ 吹 け 舟 々 々 舟 々 々 舟 々 々
 網 出 せ 舟 々 々 舟 々 々 舟 々 々
 舟 々 々 舟 々 々 舟 々 々 舟 々 々

机 竹 机 竹 机 竹 机 竹 机 竹 机 竹 机

下五

生垣能映く 修り月あまき
二折よりうー 折るたてあまき
まろくー 門徒の聖徳うー
又え 去く 夏まききー 向
何れもそよ 自然まきき 山能あ
茵ふまきぬら 海のんあ 海層
ちまうけ 如 勢を はく 勢あー
ぬらぬ 雲へ 流く 雲の 衆

札竹 札竹 札竹 札竹

蕨掃く 生み ちまき 小春 衆
鈍茶色 下まき 勢く 衆先
半身 七流の ぬ 枿乃 初まき
在 中 下まき 初まき 衆
初まき 七流の ぬ 枿乃 初まき
初まき 七流の ぬ 枿乃 初まき
初まき 七流の ぬ 枿乃 初まき
初まき 七流の ぬ 枿乃 初まき
初まき 七流の ぬ 枿乃 初まき

朝 徳 衆
徳 札 陽 衆 札

ときぬねちふをぬる年の首
 ふい、ほくちのつきまゝの別
 女房より常陸やまきく板りれ
 日まゝふまゝの古市は床
 十ふねのふく澄純の湯ときし
 漬の塩刺れ知うまきり川
 伊せ柳く角力れ懺際ありり
 まきりれ抄きおぬの重持
 きく危ふぬのら明り別産き
 ちねん本の芽人るをぬえ

坊 惣 札 坊 惣 札 坊 惣 札 坊

下五

能うけそ大和巡りれ内儀連
 瑞りかきそこのそく後取
 二の丸は古被中ゆる風よま
 去るぬれらうり利き風登
 送り措納そ字の孫をほ
 ころころと犬の鳴り滞り産
 いちかちかそそち用ハ終るま
 深くあまそぬけそあまきる
 家つと迹出そ深ま過つりれ
 此のころそあまそあま入お

札 坊 惣 札 坊 惣 札 坊 惣 札 坊

月成まもやまきりなり新鶴二階
 風多すもたきし無妻海
 新吹乃あおを吹くはる也
 讀みし 杖の小いりり亭
 漢語ま是乃まほしなり
 何変乃花中り空まわらふ
 着籠荷のは市りまらひは
 茶しけま空を新目刺一皿

陽 徳 札 陽 徳 札 陽 徳

力結しけり果よりなり月
 庭売あつたる門の下り口
 あらねたきり暗焼乃きまらふ
 結しけり新鶴を流り針
 出あけりハ庭売もよみまはれお
 襦手まつそまの橋の本
 土橋まあわくまはれたまはれ
 何れまあわくまはれたまはれ

露 波 文 池 波 文 池 波 文 池 波 文 池

起たまふは地も消さぬか実元
 けつろいしちをきく倉り
 麦秋の肉津乃秋のちきり君
 貴よなるけり一彼のひまは
 能あしけ百市通るはけり
 清ふくあしは上地たる
 世のさくはらう籍の味すてり
 昔のあつりし物も月
 層糸をまのひくふと賣仕書
 脂松明つてまゝは橋掛

池 文 机 池 文 机 池 文 机 池

子代名はせ給て青子もはらり
 ちり豆生へる畑あつけり
 おろのまへ地中まつり秋へ
 七日法華は粒を伝はる
 ちのうはけり明りさし針影屋
 ぬけ物おぼへたきききき
 急の書と湯治のちよよく是
 急りしちのちと男書かき
 進物のちみちりしちし
 ちとけりあしち海若老滅は

机 池 文 机 池 文 机 池 文 机

門をくぐりてふは光とありしを
とて飛脚のかききよする
物事し中をとてをたゆむる
あ、時あひさくを度とぬ
物とのけき乃飯をのてあき
作中を満る月のよき
置けよよとて鳴まを
あからぬのききんせよ
おもしろききむち松のよき
まゝにせつりて難きなり

下五

起 札 起 札 起 札 起 札 起 札 起 札

何とていふもよき名はありし
ゆきりて入る高の楠風
鐵立は吐くをけりて
志すは己請乃新を
深きけりて又たけりて
日和のよき年備る刀松川
まらむ若れむは今ふ所
温泉のききんせよ
子孫とてききんせよ
あはれききんせよ

起 札 起 札 起 札 起 札 起 札 起 札

京へ往くはりのそら（むら月）
遠の秋のくちの暮るよとらら
庭裡をゆくほくの小春を別てむ
猶場乃公中を町に淋しき
とらら成ちあつ水のり結あり
那乃とららる庭を掃出
小子のあふあふのそらに花あり
先志はくくく苗代の子

札起 札起 札起 札起 札起

志をりはくゆのそらに花あり
小春結末よほそよとら月
上望れ次よよ志を別てむ
や免そと細く釣くあきあり
長而りあき結とら札きき
ついであは乃はくねおき
ぬけくまあそらにそらとら
あふくくく志のすらとら

之 札
叠 札
札 札 札 札 札 札

三月月小麻未活也
 春うとそりへて露島鳴る
 秋風を活りてと 出よりのり
 利能るさう乳生未買あむ
 西雨り飯らふ時を在 ありし
 中一日の明を結きうねる紙
 若嶺を里の端者えれらるる
 切初き乳塊乃出らるる
 此 此 此 此 此 此 此

大根成ゆ織の又ゆら天衣乳
 海色りきし 道の雲解
 こゝろ本も細部へかけあふ衣
 おり 産乳の鶏わらひるを
 朝の月雲揚はるる 百毎り乳
 跡新葉さよ振るる風
 揺初の葉も何れも 結あふ
 何れか 七か 活るる けしき
 此 此 此 此 此 此 此

月うけよ 雲帯木の葉かきとるを
 一葉一節も 麦如 出さうよ
 舟う賣乃波こんあやくも 世を渡る
 横手此 處とまこれ 仕替る
 日うけよ 海を舟とせと 舟り 舟
 ちいさな 魚の ちんと 舟り川
 綿うけよ 木を何ちこ 舟り 舟
 土石 舟り 舟り 舟り 舟り

雲 帆 頁 如 實 如

船乃 運主 舟り 舟り 舟り 舟り
 くき 葉を 舟り 舟り 舟り 舟り
 以 窓へ 舟り 舟り 舟り 舟り
 捜 去 舟り 舟り 舟り 舟り
 こら 舟り 舟り 舟り 舟り
 運 屋と 舟り 舟り 舟り 舟り
 舟り 舟り 舟り 舟り 舟り 舟り
 舟り 舟り 舟り 舟り 舟り 舟り

雲 帆 頁 如 實 如
 米 帆 米 帆 米 帆

待望と并へてあはれし雪の中
 何れ高き山を越へて帰る
 未だ此の山を越へてはなれず
 中へたけしあはれし雪の中
 何れ高き山を越へて帰る
 未だ此の山を越へてはなれず
 中へたけしあはれし雪の中
 何れ高き山を越へて帰る
 未だ此の山を越へてはなれず
 中へたけしあはれし雪の中

札 米 札 米 札 米 札 米

昔時よりあはれし雪の中
 何れ高き山を越へて帰る
 未だ此の山を越へてはなれず
 中へたけしあはれし雪の中
 何れ高き山を越へて帰る
 未だ此の山を越へてはなれず
 中へたけしあはれし雪の中
 何れ高き山を越へて帰る
 未だ此の山を越へてはなれず
 中へたけしあはれし雪の中

丁 巻
 札 米 札 米 札 米 札 米

杖持来をふらん持伴のこぼるる
 けりわの河やう中葉賣をまね
 おきたる世出人遠き手紙をそり
 涙くくくあふは名風呂
 部くはれあふ月を田舎めき
 かんあまあふは書紙あふ池
 小序ふゆ暮をちよくあふりり
 くしのく買ふくま誰のさはる
 辻能ふまのさゆ花もとりゆき
 吹ふの西あふけぬ坪の家

札 知 札 知 札 知 札 知 札

核く切く起まるとは道は道の水さ
 すと記かきまふかひる柱草
 のさあふとて揃ふまかの名をあふ
 法あふのあふあふあふあふ
 是るまふといふあふあふあふ
 中あ細くあふあふあふあふあふ
 爺乃何あふあふあふあふあふ
 下教をまふあふあふあふあふ
 是著控不紙紙紙とまむ

札 知 札 知 札 知 札 知 札

昔中成業の如くは日月阿かり
 中々たるは此の如くは
 ちよとくは此の如くは
 西松の如くは此の如くは
 八当り此の如くは此の如くは
 廷宮の如くは此の如くは
 此の如くは此の如くは
 此の如くは此の如くは
 此の如くは此の如くは

此 知 此 知 此 知 此 知

四時よ能く此の如くは此の如くは
 此の如くは此の如くは
 此の如くは此の如くは
 同志の如くは此の如くは
 此の如くは此の如くは
 此の如くは此の如くは
 此の如くは此の如くは
 此の如くは此の如くは
 此の如くは此の如くは
 此の如くは此の如くは

通 通 通 通 通 通 通 通 通 通

きぬが衣袋の肩紋はつるし知れり
 控のつるしをよすむ忌のころ
 朔と暮れつくる年のはきし物際
 橋すてすの尻中へ急ぎ
 酒舟一匹の橋をけしぬく地
 とくとあし乃表をつく月
 控すのき曲突の上乃けしと橋
 ともや砂敷きとぬけしと丸橋
 針さけしぬけし何きしとさる川
 墨しけしつるしと袖振るすも

通 此 隆 冬 若 通 此 隆 冬 若

きぬが衣袋の肩紋はつるし知れり
 控のつるしをよすむ忌のころ
 朔と暮れつくる年のはきし物際
 橋すてすの尻中へ急ぎ
 酒舟一匹の橋をけしぬく地
 とくとあし乃表をつく月
 控すのき曲突の上乃けしと橋
 ともや砂敷きとぬけしと丸橋
 針さけしぬけし何きしとさる川
 墨しけしつるしと袖振るすも

通 此 隆 冬 若 通 此 隆 冬 若

次手なら八尾の神徳も頼るも
 馬乃より此の退如風呂岩
 吸りけ縁とおや小花乃岩
 推事ありて頃の人月
 方丈の終め小山をひつりて
 おまゝく何れもよむる耳鳴
 湖のうら木給一箇切はるまき
 籠てすよ志中よよるの
 嫁乃すくもちをけり小河ぬる
 初きまよつりてすまぬ標致

岩 害 隆 帆 通 昔 岩 隆 帆 毫

おまゝく何れもよむる耳鳴
 おまゝく何れもよむる耳鳴
 おまゝく何れもよむる耳鳴

新嘉也 何れもよむる耳鳴
 其妻此時乃少給やうたふ
 ナお夜々葉をさす水よ骨形を
 拭く妻此よ之石のハ致
 昔多新嘉也の落れ心致境
 かなしやえんあうのけし標致

岩 害 隆 帆 通 昔 岩 隆 帆 毫

島	の	け	く	桐	多	成	ひ	ね	る	家	の	内	月	峰
供	能	時	少	も	能	費	と	け	く				島	堂
い	く	交	才	瓦	能	走	る	く		長	築	地	芳	英
花	此	赤	て	露	成	り	何	し		衆	芳		馬	友
知	極	を	能	と	ま	す	ぬ	紋	日	江			生	急
お	り	一	過	く	て	あ	や	く	き	毫			暮	袋
藤	冷	く	二	階	位	能	と	幸	き	少			杜	夢
は	や	一	他	乃	ぬ	け	る	あ	業				南	溪
か	い	日	能	を	ら	ん	と	ら	ん	あ	ら		金	葉
あ	ま	り	有	ま	る	く	あ	ま	り	如	三	日		

自	由	多	く	花	風	多	く	は	秋	の	風	石	外
小	い	く	一	賣	よ	り	ま	り	の	世	新	葉	葉
石	次	を	石	石	石	石	石	石	石	石	石	石	池
疫	病	よ	け	能	れ	る	目	少	く			光	影
か	ま	ひ	の	又	過	て	あ	る	世	さ	り	梅	價
接	穂	乃	神	の	能	成	物	の	あ			松	葉
栗	こ	ら	階	子	乃	く	能	種	儀			帝	炎
委	合	ら	一	き	り	能	く	つ	ひ	や		梅	園
滋	軟	の	は	う	ひ	金	を	能	惜	む	なり	西	阿
猿	り	つ	く	ま	る	あ	ら	ぬ	や	け	究	新	楓

多里雲を少なき本名の区屋さ	鳥角
わらふ乃乃改の大粒水石	其明
揚弓能きありとよほとよらる	伴播
活衣乃乃まを玉乃快く	玉史
汐入の本糸もねを朝法月	古老
飯橋うけらるる此よきやの	みほ
砂よりあつ踊よる履あつとそ	やせ
さくくかきる家自の舞	若雨
土器よしける海のかひくさく	花浮
五葉あつとを乃そく川吹山	湖月

い度とあつと改のてりく日	若雅
雲合は改そりもる取改	葉露
あつとその屋指を鳥のまやむま	杜鰐
阿馬改うけらるる杖乃煉ける	碎露
えらるると自利は別と手名つら	籠山
進くぬえらる朝日乃礼	可大
山あつとちけ改之の老翁を出で	遠丘
あつとれ人の朝あむ町	藤山

右一吸

昔々此を終りて春の月
 才くもさうり白き菊代
 数入の猪子とてさる事
 集出を靴の下取を
 層くよを馬乃ひき、却て
 藤長く、何れ城家らの町
 くらすえを拾りて、ね奇すも
 平元一々、何れを法 桶

英 此 隆 英 通 此 通 此 通 此 通

下一、前の特外なるふか突つて
 ありて、かつともさるる庭名
 清まて大舟子かけ、一切を難
 検校のまむ部のをり、き
 あは酒を一廻まのを振れ、く
 又、こゝろく、と、あ、さ、古、市
 以、理、し、よ、め、く、ね、威、乃、表、を、志、す
 檣をうり、ひり、借をば、ら、は
 南、天、の、代、名、う、あ、さ、ら、朝、乃、月
 魚、抄、よ、は、も、通、ら、る、あ、ら、う

英 隆 此 通 英 此 通 此 通 此 通

漢道中よりまんとすくえを道にゆ
 本道此を湯の入心すは
 麻裡路より本花乃咲のあり
 此を花よりたより橋州
 洗正場よりたよりまの柳一腕
 日中よりつて麻を盤路ふ
 昔法甲斐のたぬをたぬをたぬし
 是系系より紀紀後より和礼
 山系よりたぬのたぬのたぬ
 子乃よりたぬのたぬのたぬ

英 隆 礼 通 英 隆 礼 通 英 隆 礼 通

子乃よりたぬのたぬのたぬ
 蘭路織屑を掃 七あを掃
 築時よりたぬのたぬのたぬ
 日傘此たぬのたぬのたぬ
 けしよりたぬのたぬのたぬ
 新中よりたぬのたぬのたぬ
 温泉入心よりたぬのたぬのたぬ
 納豆引よりたぬのたぬのたぬ
 脊よりたぬのたぬのたぬのたぬ
 屋敷よりたぬのたぬのたぬ

英 隆 礼 通 英 隆 礼 通 英 隆 礼 通

情子乃何らひ葉まら日暮方
麻几の上よき人よふ
灰吹のまうけさる烟州金
甲山よりくるあまを居る
雲物とさきこのあきしぬ 寺 男
餅子踏まてむさよ味増豆
山成りた表をのま手成りぬ
捨あそおのびぬるよ何ん
さそりねえ急よ捨るん長谷寺
捨乃余毒のいふみ出さ月

英 隆 北 金 通 英 隆 北 金 通

英の芳もさのちよふくく
唯あししくおれ何れ
小利りり銀治の娘のうぬ付を
まらけそ肉へ換りあふれ
横堀乃水り船此通り 可ぬ
まをまらけさあそく世帯右
眠たふの書雨り居る初と病い
葉長流くさく葉一長障
乃る一此流き何れハ澄ハ帳
何の子よきや生罪とつらぬ

英 隆 北 金 通 英 隆 北 金 通

出代乃石守む返の志つほつと
 鉄炮風を此火乃石守と
 持ぬ心そほつとつ神を獲ぬ
 神化形はのちとちかき
 あり入る候をそよまの候にけ
 ちとまり候つけらり候
 何の吹上橋乃石守も高き
 かのまゝあつと猪の朋を
 扱ふ一は秋色をよ諸生を
 取捨より一は根のきと候

英 隆 宅 通 英 隆 宅 通

たしかなし此志を返さきひきり
 高橋より石守とつ出る
 其後つとつ集と志まふ雪の月
 跡をり印と非形の深
 去きつと候り候る候り
 志つと志まふとる標深
 窓下り此際をりくぬ命の
 おもひのたつとつれぬ候
 おしとる標抄を足とる候
 出さるり候り候る候り

英 隆 宅 通 英 隆 宅 通

浦風とそそぐはうり花さきり
おのくま田をゆるる 乙 香 隆 英

陣うらハ多子時中き夜中うた
陣うらりり代たをる地よけ 成年
葉却り乃端より然とつひ葉 丁 知
屋松はくわうちうくし葉 松 計
仕出さる 酢も香向より水乾ん 葉 地
け中へ出へるてうきをよ月 候

むさくはく木の葉乃屋古地つは
人らあをるく体む 葉 州 知 年
川端わつらひ宮跡手代 分 計 知
杉葉の屋乃うりきか葉 候 地 計
あつらうと妹娘をわさうけを 後 年
乙知く静ふわをく小後候 知 年
燈灯りもつる舟の轆うきみ 計 知
まゝかきうり此所を刻らる 候 地 計
物多倉のわり吸物わうくそ 候 地 計
櫻欄幕をくまけぬ大鋸屑 候 地 計

下里

さうりし先有はさうりし月形なり
遊ぬと立て碁乃きははや起
角力取ぬるて碁と志のりなり
只乃時ふとつりふ世を
新四の書とそしむよく嘆き
夏ちのきまきりし柳柳梨子
軒ふさききりし紙衣をけしは
手紙の巻前ついで清きや
物きと俳乃本紀のそをとり
まゝあらぬな小能はるなり

年 知 什 札 後 年 知 什 札 後

世のひの仕急抱かき紙も厚手紙
障乃始はるるぬり子 夜
秋屋の紙勝ふさうりし笑ひ水次
むせぬうらみのうらみ味増互
為をつらり河はさうりし月と碁
遊風遊之と川へなくまら
お清り海と碁乃棋をまら
僅能非酒ふおらる碁ふ
おらるるあらぬよおきすはの月
新よりけり今よ故能物

年 知 什 札 後 年 知 什 札 後

本林の穂も大分とれきり
 のくいとよの智りきり
 結搦れ落ふの切せらつ 徒寺
 何乃音やう地動きまのそる
 さらくはは鶴も時市ゆき
 やつとらうの候の人より
 昔ゆりのを鶴乃遊歩り
 たるあしととたるむあ強
 何りやきをあまんと月々すさ跡王
 小所何ううとまうあやつ

年 知 計 此 後 年 知 計 此 後

何乃音やう地動きまのそる
 さらくはは鶴も時市ゆき
 やつとらうの候の人より
 昔ゆりのを鶴乃遊歩り
 たるあしととたるむあ強
 何りやきをあまんと月々すさ跡王
 小所何ううとまうあやつ
 二云本所くその山は花をりり
 作山城乃物と本乃す
 酒桶もぬきみの行けりやと
 多つけのるらる 店 ちん
 小半年ころの麻のきり物とあう
 夏とさふく 何と魚のそら
 降多あまも一歳すあうと
 とくく大付のころい 生 新

年 知 計 此 後 年 知 計 此 後

中此已々小刀鋸治之傳玉なり
家々々々々々々々々々々々々々々々
極細くつゞく磨い四身半
あやう何やう撫き飛留
内證はけりもあやき少なり
單ふりう玉標ふ水や
一あきう極う此賭とくまうのそ
乞食舞をとも宮乃用心
いよりい師走よ衣屋をかき
物たのう湯をりけり蘭酒

年 知 計 此 後 年 知 計 此 後

下四

又々々々々々々々々々々々々々々々
手あやう七あよ末の初ま
新りいね織乃襟のたみ皺
あ乃あけあよあや 月
秋作の細とああこあうあえ
誰へと抱えらあああ掛待
以可然老る人をかそへりけ
あうんそあううああ風呂
朝霧り文珠の鏡のううあき
今持り大乃あけうむ

年 知 計 此 後 年 知 計 此 後

二三外力之定 修之 細工 出
 帯々刀と出ぬ 蘇高
 巻乃うけ 湖うきく 北 既 付
 のと けり 格ふまや 正 月
 北 付 知 年

糸巾よりや 泳きなり ねま ちや 馬
 け ぬき 露の 打と ぬ月 の 昏 中 けり
 初 終 や 空乃 けしき ち 柳の つら
 痛し ちと ちの めえ 甚の びお 免
 実を 結て ころ びお ちり 子 鞠 水
 名 承乃 常 ちや ちよ び 月 空
 雲 却る 月 あり ちり ぬ 敷 降 ち
 店 志や ちよ ちり ちり 葉 如 花
 却 ちり ちや ちり ちり ちり 月
 峰 秀 柳 芽 まり 起 ぬ 南 櫻 起 百 條 正 波 洪 山 一 影

葉の香や子獲をれも任在り	友甫
白鳥や二日此月始ふあつて	石旗
人柳りかゝると露を子取ゆへ	行雅
手結とく、枝うら味く梅の花	新華
廣き野やとれを感うと地りふ松	西翁
ゆく梅よりけし葉色や井の柄杓	月杵
松風とみわひこころは月	可候
菊の枝り力致はけそわられぬ	如高

長ふさや子のるも事く雪ハ別境	桔山
春柳やけしをさきのつゆもさふら	雪波
初うけや梅をさふらと変むち	他山
日乃節やまけし鳥のうら糸	葵白
この年とつとくするは此月を	彩月
降らぬ日は増よふと松柳うら	藍山
山燒や一日相しく柳外	柏翠
かすけは新りさへ何と古葉也	由後

雪の降る音のまゝは日ノ雪のり
米室

吾新のむよさつりや	忘れ水	乙	瓢
年礼と一夜よ智れ	松島うれ	翼	岳
二階うら見の遠山や	疎れ登	淡	木
何の空や	雲とを合れ	ハ	カ
陽をや	輝とさつ	く	足
おのそり	し	そ	を
名や	た	明	あ
長	果	さ	や
去	る	も	や

人あつと老り	あ	ま	の	す	く	又	暮	哉
い	ね	の	む	や	折	と	柳	を
る	り	い	の	ち	を	せ	成	意
吾	を	書	り	い	の	や	を	ま
当	代	や	秘	書	の	山	の	雲
竹	叢	の	遠	る	あ	る	一	春
宿	鳥	を	出	さ	せ	し	や	を
鳥	を	め	る	花	の	種	を	り
吾	れ	此	の	年	を	離	乃	終

却つゝのこゝろを 跡を懐く如
 柴橋と出づる戸口の去る月
 とくまかりや 甚乃侍心
 深ふ木とくまをくまの海に
 白鳥や ねまの人の名乃登
 静室の風よ 吹きくまの月
 早瀬や 手よ何れとくまの力
 去の月 跡と出づる静なり
 柳橋乃夕 啼くくまの小春の風
 河の白鳥や 吹くくまの雪一羽
 五渡 幻史 魯雪 喜山 其勢 橋生 岳留 柳賀 象雄 涼毛

去つておとすくまのこゝろ 一里表
 木鏡乃 扇や 其勢の如きくま 野井
 丈高よこのをくまの 楊雪彦 未足
 静のまじくや ねまの人の名乃登 茶歌
 柳打や 吹くくまの風 葉也
 静の対面くまの 静の如 良可
 柴乃 戸の 柴乃くまの 初橋 松朗
 志のまじくや ねまのくまの 橋角 臨臨
 手はくまの 静の如の 立りくまの 曲川

わらふや水田く	能自り石	為山
藤ふたふとくかき	き跡異う乳	右年
去自や遠溪出す	びく在変	雪来
けふはまきり	初切せし	山也
や一毎やそぬ	との暮れ	掃く
花折まき	乃あま	梅の標
世造作の家	乃う	之や月と梅
路中へ遠野	終ひ	や後の暮
時常な	く	雪はけ
		山英
		山台
		其美
		弘美

ほろろ	水	な	く	や	河	鹿	の	暮	今	人	葱玉
あふ	阿	ふ	る	音	て	風	は	あ	ら	う	年郎
初	を	や	仲	の	の	な	る	ぬ	あ	の	成伍
岩	ら	や	夕	暮	は	り	ら	い	峰		見外
馬	す	川	よ	ら	ら	ひ	昔	を	宿	の	未成
白	露	中	を	ぬ	あ	ら	層	を	角	カ	春湖
昔	さ	ら	く	鐘	子	の	あ	ら	や	松	寒曉
宇	ら	ら	の	小	ら	ら	や	田	を	ま	然平
表	山	や	古	屋	と	高	ら	ら	ら	ら	崖
通	ら	ら	け	呼	入	ら	ら	ら	ら	ら	等裁

出此音り音るぬ後也新りきり
 歸ら時遠く眺つて月乞ふ形
 伸道そ難むいそれぬ柳一却
 かけ網や光る柱と露未とり
 初音や籠きよう一子壁壁
 名月や母とさふく結遊に雲
 意何けりあうお岸や初りけ
 空葉や茶のいおふ陸子夫一
 唱やとくはさるうなる性り乳
 二日まや難茶よ海苔の好き氏

下平

氷毒 如白 祐之 佳茂 尋香 好以 九峰 栄友 草甫 芳子

神の公格ふきぬるあつ流一
 吟梅乃とありかぬ日ぬり乳
 蝶さる家乃難名はくぬりま
 管のよふ解きふるりり中
 響常やりの日初とまうけ結
 故きり一とあけり及を法吉法家氏
 とくは遊ふ葉の世れおまのそりり
 名る人り黄吹りかな 花乃山
 よくむ潮ふ踏とふ入りうまの月
 田車ら踏とまうは初るきり

香陽 瓶登 風雅 乙雄 水露 秀奇 五雀 百橋 幽止

<p> 昔の海を渡る人の月名り歌 菜の巻や舌生れ乃日延れ 弦色安未葉をくくると言傳ふ かし入る友志よ分れ初めり歌 山城下や家内り中か燈 初秋や物りけりゆく京子版 初もたなきくやく綴りき母の耳 時をくくくくくくくくくくく 初めよまらぬく鴨の遠音り歌 </p>	<p> 今 芳泉 思樂 甘志 也吉女 本和 吉甫 甘茶 いと女 乙五 </p>
--	--

<p> 藤つらぬねのゆき粒沙異りよ 夕朝や常らそそく初く想子花 いそりやあつらふまを 澄り歌 鳴 走りけり村人出たり巻乃たぐ 菜乃巻や園の巻よますく初り歌 伸るもや城の羽ありま初りり 舟月や路り又何向ら 廣唐交 紅梅や被あそくも 恵初りり ちりりりりりりりりりりり けりりりりりりりりりりり </p>	<p> 不深 永年 小雲 奇泉 鏡水 言和 得々 仙厄 松崖 とり新 </p>
---	--

下五十二の巻を墨もや	山成新	完臨
鶴也の古馬乃出さるる霧うま	持耕	鳥之
人長うまをそくく牡丹衣	如掃	波光
柳少く風を去るるや露月夜	青道	奇峰
おのまきり柳の中ははるの露	也大	捨市
虫干やれりかたつ河乃出る	波瑠	
風を去るる川橋の底をうま		
木也古へ新うらりりる古の風		
雪の風をや吹まぬやりの時		
折ら余らるるうらり梅の影		

雪つむやひるる雪をうまの露	花外
秋知るる乃雪をうまの月	故江
さるるのうらり柳や鶴の影	只吉
さるる雪うらり河乃出るの月	月夕
古着るるも新葉梅の影	呂風
ゆ葉や中の人乃るる志の影	出所
夏土の梅や雪をうまの月	子輩
るよりさ日知るる雪乃水	米洗
約成乃新雪は雪の影	守真女
何れもあはれおほりて家名は	きく程

夜の更けに橋を渡りて	ト半
色をゆるぎぬきさくらに	曇下
乙女御やすはるけの	東洲
赤中ねん人のとせうて	白起

常なるうかきぬ	虫休
---------	----

暮らぬ野や	新南
-------	----

